

# 随想

東京国際大学女子ソフトボール部総監督  
ビッグカメラ女子ソフトボール高崎 シニアアドバイザー

う つ ぎ た え こ  
宇津木 妙子



## ソフトボール人生

2016年8月4日未明。夜明け前の暗がりの山道を、私は祈るような気持ちで歩いていました。縁起だるまで有名な、群馬県高崎市の少林山達磨寺(しょうりんざんだるまじ)を目指していたのです。ちょうどその時刻、地球の裏側にあるブラジル・リオデジャネイロでは、IOC(国際オリンピック委員会)の総会が開かれ、2020年東京五輪・パラリンピックの追加種目について審議されていました。2008年北京大会を最後に五輪種目から除外された「野球・ソフトボール」が復活できるかどうかが決まる、重要な局面でした。

高崎市内の自宅にいた私は、もう、いてもたってもいられません。願掛けの意味も込め、黄金のだるまを持って達磨寺へと向かいました。日が昇るころ、「野球・ソフト復活」の一報が舞い込んだ時は、本当に飛び上がるくらいうれしかった。万感の思いで、だるまに目を入れて奉納してきました。「ソフトボールが2024年、2028年も五輪種目として続くかどうかは東京五輪の成功次第。責任は重大だぞ」と、自分に言い聞かせながら――。

現場の第一線から退いた私にとって、現在のライフワークは、ソフトボールの普及、拡大です。競技の魅力、素晴らしさを知ってもらうために、国内外を駆け回る日々を送っています。

競技の知名度が低いヨーロッパやアフリカ大陸には何度も足を運びました。自らノックを打ってプレーする楽しさを教え、競技が盛んな国と、そうでない国との「温度差」を埋めようと必死になりました。全世界の関係者が心を一つにして「五輪に出たいんだ」と強く思わなければ、願いはかないません。一度除外された競技を五輪に復活させるのは、それだけ難しいことだったのです。

2011年にはNPO法人ソフトボール・ドリームも設立しました。競技を通じ、老若男女、さらには身体障がい者、知的障がい者などの垣根を越えてスポーツに親しんでもらおうというのが活動理念です。東日本大震災で被災した子どもたちのために、東北地方でソフトボール教室や大会も開いています。福島県で出会った中学生は、目を輝かせながら私に「ソフトボールでオリンピックに出るのが私の夢です」と言いました。彼女たちの思いに応え、さらに次の世代まで引き継いでいくことが、ソフトボールに育ててもらった私たちの使命だと思っています。

だからこそ、4年後に迫った東京五輪はとても大切な舞台になります。白熱した試合、プレーを世界中に発信して「ソフトボールってこんなに面白いスポーツなんだよ」とアピールしなくてはなりません。金メダルの期待がかかる日本代表のメンバーには、レベルの高い一投一打で見ている人たちを魅了してほしい。どんな時も手を抜かず、ひたむきにボールを追いかける姿で、子どもたちのお手本になってほしい。心から、そう願っています。

私も、一人でも多くのソフトボール愛好者を増やすことで未来に「恩返し」がしたい。五輪復活の喜びをかみしめるとともに、身の引き締まるような思いで日々を過ごしています。